

第 41 回目 新しい人を身に着る (13)

はじめに

● 前回は、「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」という聖句を学びました。「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」ということばは、他の聖書では以下のように訳されていました。

(新共同訳) 「キリストに対する畏れをもって、互いに、仕え合いなさい。」

(柳生訳) 「キリストを畏れ敬う気持ちから、互いに、ゆずり合いなさい。」

(尾山訳) 「キリストに対する恐れをもって、互いに、相手を立てなさい。」

● 特に「キリストを恐れ尊んで」という部分は、この後に展開していく「夫と妻」「親と子」「主人と奴隷」の関係における全く新しいかわりの視点を示すものとなっています。「キリストを恐れ尊ぶ」という土台がなければ、互いに「仕え合う、ゆずり合う、相手を立てる」という新しい関係は成り立たないのです。「キリストを恐れ尊ぶ」とはどのようなことでしょうか。使徒パウロはこの手紙を書く上で、神がキリストを通してこの世の基が置かれる前からあらかじめ決めておられた計画について第 1 章で語っていました。つまり、「キリストを恐れ尊ぶ」とは、神のご計画とみこころ、御旨と目的という視点から物事を考えなくてはならないのです。それがパウロの言う「新しい人を着る」ということだからです。今回はそうした視点から、「夫と妻の関係」を取り上げます。「互いに従い(=互いに仕え合い、互いにゆずり合い、互いに相手を立て)」つつも、「夫と妻」という関係における特別な秩序があるのです。その秩序には、神のご計画とみこころ、御旨と目的が反映されていなければなりません。それゆえパウロは、「妻たちよ」(22~24 節)「夫たちよ」(25~32 節)とそれぞれに対して、「従いなさい」(33 節では「敬いなさい」と言い換えられています)、「愛しなさい」と命じていると同時に、その理由を明確に記しています。

● 「抛り所がこわされたら正しい者に何ができようか」(詩篇 11:3)とあります。パウロも同様に、神が望んでいるみこころについて、常に、根源的なところから掘り起こそうとしています。それはまさに詩篇の作者のいう「抛り所」なのです。結婚についても神のご計画の最も深い秘密が隠されています。夫と妻の関係もその抛り所となるところから考えられているのです。ちなみに、英国の著名な説教家であった D.M.ロイドジョーン師は、エペソ人への手紙 5 章 22~33 節の箇所からなんと 11 回のメッセージをしているほどです。

1. 教会に対するキリストの並々ならぬ愛

● エペソ人への手紙 5 章 22~33 節で、夫と妻の関係について取り上げられています。あえて、夫婦について取り上げられているのは、その背景に、キリストの教会に対する並々ならぬ愛が注がれていることを知ってほしいからです。夫婦であっても、やもめとなられた方でも、独身であっても、キリストを信じる者はすべてキリストのからだとしての教会に属しています。ですから、自分に対して注がれているキリストの愛を知り、どんなに自

אגרת שאול אל האפסים

分が愛されているか、やがて自分がどのような立場になるのか、キリストに対する畏れる気持ちを新たにしなければなりません。まずはテキストを開いて読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 5章 22～33節

22 **妻たちよ**。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

25 **夫たちよ**。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、

27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

30 私たちはキリストのからだの部分だからです。

† 31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」(第二版では「一心同体」)

32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

●テキスト全体を観ると、妻よりも夫に関することが二倍近く多く語られています。実に、教会に対するキリストの並々ならぬ愛について多く記されていることに注目しなければなりません。その前に、妻に対して、夫に対してそれぞれ教えられていることを整理してみましょう。

(1) 夫に対する妻への勧め・・・「妻たちよ。自分の夫に従いなさい。自分の夫を敬いなさい。」

●「従いなさい」「敬いなさい(尊敬しなさい)」と訳された動詞の文法情報は、いずれも「命令形、現在、中態、2人称複数」です。つまり、自分の夫に対して「自らを従わせ続けなさい」「尊敬し続けなさい」という意味になります。それは「主に對するよう」にありますから、ここでの妻はクリスチャンであることが想定されています。

●「妻たちよ。自分の夫に従いなさい。」という部分だけを読むなら、反発する人も多くいるかも知れません。現実にはそう甘くないからだだと思います。シンガーソングライターのさだまさしが作った「関白宣言」という歌があります。「お前を嫁にもらう前に、言っておきたいことがある。かなりきびしい話もするが、俺の本音を聞いておけ。・・・黙って俺についてこい。」という内容です。この曲が作られたのが1979年と言いますから、今(2016年)から37年近く前に作られたミリオンセラーとなった歌です。その背景には、ますます弱くなりつつある男性の地位、そのために歌の内容はかなり強気な発言になっています。結婚を前にした男が相手の女性に向

けて「亭主関白」となることを宣言しつつも、自分のもろさや弱さ、相手に対する依存心を垣間見せているという内容をコミカルに歌い上げているものですが、この「関白宣言」の後、いつの間にか、「関白失脚」の歌が作られたようです。心境の変化があったのでしょうか。その歌の出だしはこうです。「お前を嫁にもらったけれど、言うに言えないことだらけ、かなり淋しい話になるが、俺の本音を聞いておくれ・・・」となっています。

●「妻たちよ。自分の夫に従いなさい。自分の夫を敬いなさい。」という命令の背後にある理由は、キリストが教会のかしらであるように、夫は妻のかしらであるからというものです。夫と妻の関係がキリストと教会、かしらなるキリストとからだなる教会の関係と密接な関係にあることを教えています。

(2) 妻に対する夫への勧め・・・「夫たちよ。自分の妻を愛しなさい。自分の妻を自分と同様に愛しなさい。」その理由は、キリストが教会を愛して、教会のためにご自身をささげられたように、妻は夫のからだであるからというものです。

●キリストと教会の関係が「かしらとからだ」のたとえとして、そのまま夫婦の関係に映し出されています。夫は妻のかしらであり、妻は夫のからだです。それは切り離すことのできない一体の存在です。キリストが教会を愛したその愛を私たちは知らなければなりません。キリストはからだである教会のために一すなわち、私たちのためにいのちを捨てられたのです。

2. 「愛する」とは、「養い育てる」こと

●聖書が意味する「愛する」とは、神のご計画とみこころ、御旨と目的が実現するために、自らそれに参与することを意味します。御子イエシュアの場合、それは自分のいのちを私たちのために捨てるということの意味しました。そのような愛で私たちにいかかわってくださっている(過去・現在・将来)のです。そのような愛に目が開かれるならば、黙っていても、その方を慕い、敬い、従うことは決してむずかしいことではありません。キリストが教会を愛された愛は、ご自身のいのちを捨てられただけではありません。死からよみがえって、今も、教会のために、「**養い育て**」て下さっているのです。

●「愛する」(25節「アガパオー」ἀγαπάω)とは、「養い育てる」(29節「エクトレフォー」ἐκτρέφω)ことと同義です。「養い育てる」の前半の「養う」とは、食べさせる、糧を与える、養分を供給すること。健康、成長、幸せに心を配ることです。キリストが教会を「養う」という場合、集う人々にパンを与えるということではありません。ある教会では愛餐会をしない代わりに、列席した方にパンを配るという話を聞きましたが、ここでいう意味の「養い」は、いのちの糧、神のことばによって養われることです。イエシュアは言われました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつのことばによる」と。私たちが教会に属し、教会の集まりに出席することを通して、キリストが私たちを霊的な糧をもって養ってくださいます。それは、神の子どもたちが、いつも、霊的に健康であり、成長し、幸いでいられるためです。自分ひとりでも、霊的な養いはできますが、それがなかなかできていないのではないのでしょうか。「二人でも、三人でも、わたしの名によって集まるところには、わたしもそこにいる」と主は約束しておられますが、教会の集いには特別な主の臨在が約束さ

れているのです。ですから、教会において私たちが生きること、そこに身を置くこと、そこに身を置くことの責任を担うことはとても重要です。

なぜなら、教会において、主が私たちが養って下さるからです。

●ちなみに、エペソ6章4節で、親が子を「育てる」と訳されていることばも実は、同じ「養う」(「エクトレフォー」ἐκτρέφω)ということばです。つまり、親は子に対して、単にパンだけではなく、主の教育と訓戒によって養育しなければならないのです。そのためには、両親が神の教えによって養われている必要があります。でなければ、できないことです。夫婦関係においても、夫がその霊的なリーダーシップを執ることを神は願っておられます。これは神の創造の秩序です。

●「養い育てる」の後半の「育てる」は、本来、着物を着せて暖めて「いたわる」ことを意味します。そこから、世話をする、面倒を見る、保護する、配慮するといった意味が派生します。原語は「サルポー」(θάλλω)です。「養う」だけでなく、すべての面において、「世話をし」「面倒を見」「保護し」「配慮する」・・・これが、キリストが教会に対してしようとしておられることです。しかも継続的にそのことをなさっています。それがキリストの教会に対する愛なのです。私たちはキリストによって、神のことばによって養われ、「世話をし」「面倒を見」「保護し」「配慮する」という牧会的な働きによって育てられているのです。これは教会における牧会的な働きとなって現わされます。

3. キリストが教会を養い育てる目的

●キリストが教会を養い育てる目的は、「教会をきよめて聖なるものとするため」です。つまり、換言するならば、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く、傷のない栄光の教会を、ご自分の前に立たせるため」です。だれでも年をとると、特に女性(教会も妻という女性名詞)は「しみやしわ」が気になるものです。多額のお金でしみを取り、しわをのばす化粧品を買われる方も多いでしょうが、やがてはどうすることもできません。しみやしわも、長年の生きてきたその人らしい顔の一部として美しく感じられるなら良いのですが、そうもいかないようです。

●驚くべきことに、ここではキリストと教会の関係が「かしらとからだ」のたとえから、花婿と花嫁の関係に置き換えられています。つまり、将来実現する「婚姻(結婚)、小羊の婚姻」のたとえになっています。花婿であるキリストは、やがて自分の花嫁となる教会に対して、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く、傷のない栄光の教会を、ご自分の前に立たせる」のです。この世での結婚式の場合、花嫁を美しくして、花婿の前に立たせるのは、花嫁の親です。あるいは肉親です。ところが、花婿がキリストの場合には、キリストご自身が、花嫁を自分の前に、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く、傷のない栄光の教会として、立たせることのできる唯一の方なのです。

●「栄光の教会」とは、キリストの愛で輝く存在を意味します。そのような愛をもって夫は妻を輝かせなければなりません。それはキリストが教会をそんな愛で愛しておられることを反映するためです。今一度、夫である者

אגרת שאול אל האפסים

は、そのようなキリストの愛をもって妻を輝かせているか、自ら問わなければなりません。そのためには自分がキリストの花嫁として並々ならぬ愛をもって養い育てられ、輝かされる存在であることを知る必要があります。妻も同様です。キリストの花嫁として、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く、傷のない栄光の教会として、立たせることのできる唯一の方、花婿なるキリストの愛を知って、その方を敬い、喜んで従う者とならなければなりません。そしてその姿勢で自分の夫を敬い、従わなければならないのです。

●「**栄光の教会**」、それはキリストの花嫁なる教会であり、花婿なるキリストの愛できらきらと輝いて生きる存在なのです。そんな花嫁の教会として生かされるように、花婿の愛に心を向けたいと思います。しみのない、しわのない・・・そんなものはあり得ない、つやつやとした存在の中に私たちがいることを感謝しましょう。そして、ひとりひとりがキリストに従う者となりましょう。

●使徒パウロの使命は、以下に記されているように、花嫁なる教会を花婿なるキリストにふさわしいものとする
ことでした。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント 11 章 2 節

・・・私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

エペソ人への手紙も、そうした使命に立って書かれたものです。